

より実感を持って「災害」を捉える ～単元を通して地域の材から社会的事象を学ぶ～

梶山雄太 | 新潟市立上所小学校

1. 地域の材を教材化する

今までに新潟県内で発生した新潟地震や中越地震などの過去の災害と、小学校区内にある「ディアランド」というテーマタウンを単元を通じた教材として扱った。児童は、大きな災害というものを経験していない。だからこそ、地域の題材を取り上げることで少しでも災害を身近に感じてほしい。

ディアランドは、地域の防災拠点としての機能を果たすテーマタウンで、市との物資協定を結ぶスーパーマーケットや、津波避難ビルに指定されているマンションなどがある。



◀新潟市の街区「Dia Land」。

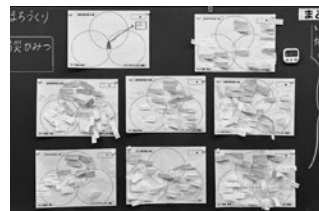
2. 生の「声」で実感を高める

新潟地震や中越地震について調べ、対処の仕方を学んでいく児童。中越地震の際に、実際に災害対策の中核を担った防災課の方や、物資供給を行った店舗の店長などをゲストティーチャーとして招き、当時の様子を語ってもらった。災害を経験していない児童にとっては、これ以上ない経験である。



3. さまざまな立場から事象を捉える

対処や備えについて学ぶ中で、実際に「人」をゲストとして迎え、話を聞く場を設定した。その際、いろいろな立場の人を迎えることで、より一般化することができる考えた。今回は、市防災課、スーパーマーケット、建設会社の3つの立場から考えることとした。この三者はディアランドという一つのテーマタウンを災害から守るために、協力し、備えている。児童は、それぞれの立場の備えや思いを聞き、一般化を図っていく。



▲三者の備えをベン図で表す。

4. 自分たちにできることを考える

単元のまとめとして、今まで学習してきたことを用いながら、自分たちにできることを考え、保護者に提案することとした。児童の中には、地震だけでなく、津波や大雪など、さまざまな災害を想定した提案を行う児童もいた。学習したことを発信する場を設定することで、より自分事になると考える。

